

とを思えば、まして「天使」のような、「羽根の生えた子供」などは、悪い冗談以外の何物でもないのではあるまいか。また、「イエス」と言えども、馬屋で生まれた、どこの馬の骨とも知れぬ輩であり、その実在さえも怪しいのであろう。これが「神」の存在となると、そんな「白髪の、杖をついた老人」などは、まったくのお笑いなのである。

そこで、文字どりの落ちを一つ。ここに、コマ（独楽）がある。コマが回って、静止しているように見える時、「澄んでいる」と言う。そして、揺れながら回る時は、「笑っている」のである。そこでであるが、「赤信号、みんなで渡れば恐くない」そうなのでは、「笑うコマ、みんなで乗れば恐くない」か。——「黙示録」六章十三節、「そして、空の星々は地に落ちぬ。あたかも、いちじくの木が、大風に吹かれて、その青い実を振り落とすが如し」：《et les étoiles du ciel sont tombées sur la terre, comme lorsqu'un figuier, secoué par un grand vent, jette ses figues vertes》。

に似せて創るとはどういうことかが、完全に理解できるのではあるまいか。

最後に、いよいよランボオの往生際に立ち会わねばならない。先ほどの *Solde* で見たように、既に諦めていた彼であるが、正念場を迎えた *Une Saison en enfer* では、予想に反して、悪鬼の如き抵抗を見せる。しかし、考えてみれば、それも無理もないことであろう。何しろ、史上最大の野心家が、18歳で「生涯」を終えようというのである。万感胸に迫り、語り尽せぬ思いが行間に溢れて、ひしひしと伝わって来る。これほど凄惨な「霊の戦い」は、他に例を見ないであろう。だが、遂に *L'Impossible* を認めることによって、彼は初めて、本当の「目覚め」に到ったのであった。以下は、その目覚めの「瞬間」である。《— Mais je m'aperçois que mon esprit dort》：「さあ、吾は今、わがスピリットの眠れるを知りぬ。」《S'il était bien éveillé toujours à partir de ce moment, nous serions bientôt à la vérité》「そ（スピリット）が、この時から常によく目覚めてあれば、われら（スピリットと自分）は間もなく真理に属するものを」（神学では、「真理」とは、真理の根源としての「神」のこと）。《Par l'esprit on va à Dieu》：「人はスピリットによりて神に至るなり。」そして最後に、《Déchirante infortune》：「胸裂く不幸ぞ」と嘆いたのは、自分がこれまで何をして来たのかが、初めて心底から分ったからであった。かくして、「詩人廃業」は必然の帰結であったと言えよう。

結 語

この論は以上のように、ランボオと「聖書」の類似点と相違点を比較することによって、それぞれの特質を一層明らかにしようと試みたものである。また以前の論で、解説中に人力が極まった時、突如「放電現象」が起ることを述べたが、その「理由」も明らかにした。これまでの論は、すべてこのようにして書かれたものである。さもないければ、世界中が百年かかっても解明できないことが、一個人に分る筈もないであろう。

なお、今回はすべての人を対象とした為、一段と分りやすく説明したつもりであるが、果して結果や如何。何しろ今もって、「*Une Saison en enfer* の後に *Les Illuminations* が書かれた」のであり、ランボオの分身は、「女ヴェルレーヌ」なのである。もしそのようなことを認めたらば、彼の作品はすべて理解不能となり、彼自身の存在も意味をなさなくなるのは必定であろう。しかし、なぜかそれは問わないのである。そもそも、ランボオでさえこの有様であるこ

en d'autres langues, selon que l'esprit leur donnait de s'exprimer》という有名な場面がある。イエスの弟子たちは、この時から勇敢で死を恐れなくなり、彼らもまた奇蹟を行うようになったのである。また、「スピリット」が人間の誕生だけでなく、その生涯を支配すべきことを、「コリント人への第一の手紙」六章十九節で、「汝等は真に知らざるや。己なる肉体は、神より受けたる己の内の聖なる霊の神殿なるを」：《Comment! est-ce que vous ne savez pas que le corps que vous êtes est le temple de l'esprit saint au-dedans de vous et que vous avez de Dieu》と述べている（ここは、自由意志の乱用による「不義」を戒めて言ったもの）。

ところで、「聖書」に関しては、一般に「奇蹟」と並んで、その「預言」が最大の疑問点になっているのではあるまいか。実は、この「預言」自体も同じ「スピリット」の働きであることが、「ペテロの第二の手紙」一章二十一節で明らかにされているのである。「預言は決して人間の意志によりて齎されたるに非ず、神の名において人の口が語りたる聖なる霊によりて齎されるものなり」：《En effet, la prophétie n'a jamais été apportée par la volonté de l'homme, mais c'est portée par de l'esprit saint que des hommes ont parlé de la part de Dieu》。それ故、「預言者」(prophète) は「神の通訳」なのである。それでは、一般に「靈感」と訳されている「インスピレーション」(inspiration) とは、何か関係があるのだろうか。先ず、「スピリット」の方は、ラテン語の spiritus が語源で、既に述べたように souffle (息, 息吹き) を意味する。一方の「インスピレーション」の方は、中世ラテン語の inspiratio から来たもので、意味は同じ souffle である（元は古典ラテン語の inspire 「吹き込む」より）。従って、両者はこの場合、まったく同じであると言ってよい。それ故、「テモテへの第二の手紙」三章十六節で、「聖書全体が神から吹き込まれしものなり」：《Toute Ecriture est inspiré de Dieu》と説明されたのである。

以上のように、「スピリット」は、「神」の絶大な力を示す言葉であるが、「ヨハネ伝」四章二十四節を見ると、「神は霊なり」：《Dieu est Esprit》と、その本質を真に端的に言い切っている。「コリント人への第二の手紙」三章十七節の、「エホバは霊なり」：《Jéhovah est l'Esprit》も、全く同じである。ここで先の、「神は人間を神自身に似せて創りぬ」という表現を、もう一度思い起してみよう。この言葉は誰でも知っているが、一体どういう意味なのか、真に理解しにくいに違いない。何故ならば、「神」が人間の形をしている訳がないからである。だが、このヨハネの、「神は霊なり」という表現によって、「神」

té l'affreux rire de l'idiot》：「春は吾に、白痴の恐しき笑いをもたらしぬ」（この作品は、1873年の「春」に書き始められた）。どこに間違いがあったのか。それを知るためには、彼が「肉体」でもって対抗しようとした当の相手、つまり「聖書」の「スピリット」を知らねばならない。

5 「スピリット」

この言葉 (esprit) は、本来は「息」(souffle) を意味する。「息」とは、勿論「命」を与えるもので、「神」にあっては、「命の創造の息吹き」である。そこで先ず、「エホバ神は土で人間を形づくり、その鼻に命の息を吹き込みぬ」(創世記、二章七節)：《Jéhovah Dieu forma l'homme de la poussière du sol et souffla dans ses narines le souffle de vie》となったのであった(「聖書」では、本来の「息」を示す時は esprit ではなく、souffle を用いている)。これを人間の側から語ると、「神の靈(スピリット)が吾を創り、しかして全能者の息が吾を生かし始めぬ」(ヨブ記、三十三章四節)：《L'esprit de Dieu m'a fait, / Et le souffle du Tout-Puissant s'est mis à me faire venir à la vie》となるのは理の当然と言えよう(ここで初めて「スピリット」を「靈」と訳したが、この esprit は、本来の「息」より意味が拡大されて、「神」の見えざる実体を指すようになったものと思われる)。また、そのようにして創造された人間の最後はどうなるのかと言え、例えば「詩篇」百四十六章四節では、「人間は、己の靈が出て行くと、己の地に戻る」：《Son esprit sort, il retourne à son sol》と説明されており、その「靈」の行き先については、「伝道の書」十二章七節で、「その時、土は元の地へ戻り、靈は元の真の神へ戻る」：《Alors la poussière retourne à la terre comme elle était, et l'esprit retourne au vrai Dieu qui l'a donné》と教えているのである。このような「神の靈」に敬意を払って強調した表現が、あの「聖靈」(Saint-Esprit, または Esprit-Saint) に外ならない。例えば、「詩篇」五十一章十一節の、「御身の神聖なる靈をば、吾より取り上げませぬよう」：《ton esprit saint, oh! ne me l'enlève pas》など、意味はこれまでの esprit と同じであることを示している。

しかしながら、この「聖靈」(靈)は、そこから更に意味が拡大され、「神の活動力」全般を指すようになった。例えば、「使徒行伝」二章四節に、「彼らは皆、聖なる靈に覆われて、靈が許すがままに、それぞれ異なる言語で話し始めぬ」：《tous se trouvèrent remplis d'esprit saint et commencèrent à parler

が、これらの表現だけでは、今ひとつ分りにくいことも否めない。それに比べると、*Solde*「投げ売り」の、《A vendre les corps sans prix, hors de toute race, de tout monde, de tout sexe, de toute descendance》：「売り物。底なしの値段の肉体。如何なる人種にも、如何なる世界にも、如何なる性にも、如何なる血統にも属せぬもの」は、間接的な表現ながら、具体的な分だけ分りやすいのではあるまいか（そのポジティブなイメージは、前回に解釈した *Antique* の「パンの息子」に求めることができるであろう）。先ず、題の *Solde* から説明しなければならぬが、この作品は *Les Illuminations* に含まれているにもかかわらず、内容からすれば *Une Saison en enfer* に極めて近いもので、彼は要するに「店じまい」のために、売り尽しのバーゲン・セールをしている所なのである（この異様な陽気さはランボオ特有のもので、それは狂気と紙一重なのだが、それでも、まだ *Une Saison en enfer* ほど切羽つまっていないことを示している）。それ故、その売物とは、彼がこれまで嘗々として作り出して来た物すべてであって、その内の「新しい肉体」に当る部分を引用した訳であるが、彼が既に「不可能」を覚悟していたことは疑問の余地がない（つまり、最終的に過去を清算する為に、自分の「青春」が「地獄」であったことを確認したのが、*Une Saison en enfer* なのである）。なお、最後の *Génie* の場合は、《Arrière ces superstitions, ces anciens corps, ces ménages, et ces âges》：「あの誤れる信仰や、古き肉体や、夫婦や、世代などは下り居れ」と、逆の表現を用いているが、やはり同じ事を言っているのは明らかであろう。

これまで、「新しい肉体」に焦点を合わせて来たが、今の *Génie* を見ても分るように、彼が個々の「体」だけでなく、人間社会全体の完全な革新を追求したことを忘れてはならない。それは、先ず肉体の変革によって意識を変革し、そこから社会を変革することを目ざしたものであるが、そこには、ランボオが一貫してキリスト教に対抗している姿が見られる。と言うのも、「聖書」は常に、意識の変革を第一に教えたからである。しかも、「コロサイ人への手紙」三章九節の、「古き人格は脱ぎ去れ」：《Dépouillez-vous de la vieille personnalité》や、同十節の、「新しき人格を纏え」：《revêtez la personnalité nouvelle》などを見れば、彼の「古き肉体」や「新しき肉体を纏いたり」などが、どこに由来する表現かを窺い知ることができよう（その他、「エフェソス人への手紙」四章二十二節と同二十四節に、上記と同じ表現がある）。

そして、あくまでも自分の道を突き進んだ彼は、やがて心身ともに破産状態を迎える。*Une Saison en enfer* の序文によれば、《Le printemps m'a appor-

voyant で用いられた名詞の《l'inconnu》と同じであることは、容易に見抜けるのではあるまいか。そこからして、最後の《Génie》は、表面は「千一夜物語」の「魔神」であるが、本当は彼自身が求めつづけた「未知なるもの」である「守護神」（守護霊）を指す。だからこそ、これを発展させた *Conte* の終りで、《Un Génie apparut, d'une beauté ineffable, inavouable même》：「時に一人の守護神現れぬ。得も言えぬ恥らうばかりの美しさなり」と、まったく同じ《Génie》を登場させたのであった。そればかりか、*Les Illuminations* の最後の作品が、正しく *Génie* なのである。そして、その中でやはり《Son corps》：「彼の体よ」という表現がなされているのだが、これはまだ解釈していないもので、詳細を論ずる段階には至っていない（*Conte* の方は *L'Interprétation II* で解釈済み）。ともあれ、ランボオにおいては、作品の全体が密接な関係にあることだけは理解して戴けたのではあるまいか（実は、これはそのまま「聖書」にも当て嵌まることなのである）。

以上は、ランボオが「スピリット」に逆らって、意図的に《chair》や《corps》を目ざしたことを検証してきた訳であるが、今度は、それを従来にない「新しい」ものにしようと試みたことを確かめねばならない。今回の論では、*Une Saison en enfer* の *Adieu* において、彼がこの「新しい肉体」について語っていることを述べてきたが、その他にも何かあるだろうか。これについては先ほども少し触れたが、前回の論において、*Les Illuminations* 中の幾つかを挙げておいた。それらの作品はいずれもまだ正式には解釈していない為、ここでは十分な説明をすることはできないが、先ず *Being beauteous* を見てみよう。その最後の、《nos os sont revêtus d'un nouveau corps amoureux》：「われらが骨は、恋情あふれる新しき肉体をば纏いたり」など、これまた如何にも聖書的な発想と言えるのではあるまいか。例えば「創世記」の、アダムの肋骨から女が創られた話など、誰ひとり知らぬ者はいないであろう（ただし、これは今日の遺伝子工学の発達を俟って、始めて予測が可能になったのである）。また、「ヨブ記」十章十一節の、「御身は吾に皮と肉をば纏わせ始めぬ」：《Tu t'es mis à me revêtir de peau et de chair》は、更に近い表現と言えよう。次に、*Matinée d'ivresse* 「陶酔の昼間興行」の、《Hourra pour l'œuvre inouïe et pour le corps merveilleux》：「前代未聞の仕事と驚異的肉体のために万歳」や、《cette promesse surhumaine faite à notre corps et à notre âme créés》：「われらの創造せられたる肉体と魂に約束されし、この超人的な事」なども、まったく同じ「新しい肉体」のことを言っているのは明らかである

Saison en enfer において、ようやく結着を見ることになる。《Ah! cette vie de mon enfance, la grande route par tous les temps, sobre surnaturellement, plus désintéressé que le meilleur des mendiants, fier de n'avoir ni pays, ni amis, quelle sottise c'était. — Et je m'en aperçois seulement》(*L'Impossible*)：「嗚呼、わが少年時代の日々よ。如何なる天気にも歩みたる本街道。食せざる事人間離れして、また如何なる乞食よりも無欲なりき。そして国も友も持たざるを誇りしが、何と愚かなる事でありしか。われ今にして、初めて気づきたるとは」(「不可能」)。

元の *Les Sœurs de charité* に戻って、次の「ペルシャにて」を説明すると、ここは先ほども述べたように、「千一夜物語」になぞらえてある為であるが、これを更に発展させたのが、*Les Illuminations* の *Conte* なのである(この題名は、「千一夜」が「コント」である所から付けられた)。これに関しては、やはり *Une Saison en enfer* の *L'Impossible* の中で、自分の追求した「理想の世界」を《*L'Orient*》(オリエント)と呼ぶことによって、この間の事情を明らかにしている。ところで、本来のキリスト教は、ヨーロッパではなく、オリエントの産物である。そこで問題が一段と複雑化するのだが、ランボオが攻撃しているのは、本来のキリスト教ではなく、「キリスト教を装ったヨーロッパ」だったのではあるまいか。事実、彼は要するに「旧世界」(ヨーロッパ)を批判していたのであるが、彼自身の中では区別がなされていなかった為に、母親の存在と相俟って、そこに決定的な混乱が生じたことは否めない。しかしながら、ようやく最後になって、《Je vois que mes malaises viennent de ne m'être pas figuré assez tôt que nous sommes à l'Occident》(*L'Impossible*)：「今ぞ知りぬ。わが不快は、われら西洋に居るを余程前に思わざりし為なるを」(「不可能」)、と気づいたのであった。とは言え、彼の「オリエント」はあくまで「理想の新天地」であるから、いわゆる古代オリエントを指すものではない。彼自身は、同じ *L'Impossible* の中で、それは昔の「エデンの園」でもないと言っている。従って、「額に真鍮の輪をつけて」いるのは、彼が、そのような意味での「オリエント」の王であることを示しているのは明らかであろう。また、「月下に」は、その彼の世界が「夜」に作られたからであるが(それ故、「イリュミネーション」なのである)、これについては、例えば *Jeune ménage* で、その「夜」に向かって、いかにもランボオらしく、「親しき友よ」と呼びかけている。ここまで来れば、この *Les Sœurs de charité* の形容詞の《*inconnu*》(いまだ知られざる)が、意味からすれば、先の *Lettre du*

ればなり。」そこに見られる肉体讃美と偶像崇拜は、かなり露骨なものである。しかし、それもその筈で、「聖書」では「肉体」よりも「スピリット」を重んじて、「偶像崇拜」を厳に戒めているからに外ならない。

それでは、ここで「聖書」の方を見てみよう。例えば、「肉体」と「スピリット」ないし「魂」との対比に関しては、「マタイ伝」十章二十八節の、「体を殺すも魂は殺せぬ者をば恐るるなかれ」：《ne craignez pas ceux qui tuent le corps mais qui ne peuvent tuer l'âme》とか、同十章二十九節の、「それ故もし汝の右眼が汝を誤らせば、その眼を剝りぬきて遠くへ投げ捨てよ」：《Si donc ton œil droit te fait trébucher, arrache-le et jette-le loin de toi》や、続く三十節の、「もし汝の右手が汝を誤らせば、その手を断ちて遠くへ投げ捨てよ」：《si ta main droite te fait trébucher, coupe-la et jette-la loin de toi》などを始めとして、数知れぬほど語られている。そして、これが「聖書」の基調とも言うべき観点なのである。従って「偶像崇拜」についても、例えば「コリント人への第一の手紙」十章十四節の、「故に、わが最愛の者たちよ、偶像崇拜は避けて通れ」：《C'est pourquoi, mes bien-aimés, fuyez l'idolâtrie》や、「ヨハネ第一の手紙」五章二十一節の、「幼子たちよ、諸々の偶像に気をつけよ」：《Petits enfants, gardez-vous des idoles》のように、強く警告されている（この「幼子たち」は、先の「最愛の者たち」と同じく、手紙の宛先の「会衆」への呼びかけである）。以上からして、ランボオがその反対を、故意に強調しているのは明らかであろう。それ故、既に解釈した *Enfance* 「少年時代」でも、自分自身のことを、《Cette idole, yeux noirs et crin jaune, sans parents ni cour, plus noble que la fable, mexicaine et flamande》：「眼黒く髪黄色の此の偶像は、メキシコ人にしてフランドル人。親なく取巻きなくして、神話より高貴なり」と、誇らしげに語ったのであった（*L'Interprétation I*）。それは勿論、家出を繰り返して、乞食か浮浪者然として放浪した頃を指す。恐らく、あの *Le Bateau ivre* 「酔える船」は、この放浪から直接生まれたものであろう（彼は典型的な「碧眼」であるが、「船」は、メキシコ湾流に乗ってヨーロッパからアメリカへ行った所から、「メキシコ人にしてフランドル人」となったのである）。彼が海を一度も見ずにこの詩を作ったことはよく知られているが、そもそも *la mer*（海）が問題なのではなくて、*la mère*（母）が問題だったことを見抜かねばならない（ランボオにおいては、*la mer* は *la mère* と同義）。即ち、先の「神なる母」、「海のアフロディテ」（つまり母なるアフロディテ）のことである。なお、この「偶像」の問題は、最後の *Une*

スピリット（神髄）だからである。

以上の予測に基づいて、具体的に作品を見てみよう。実は、彼のかなり初期のものに、この《chair》がそのまま題名に使われた、*Soleil et chair*「太陽と肉体」という韻文があるのである（元の題はラテン語で、*Credo in unam...*「われ唯一を信ず」）。彼はその中で、古代の「神話時代」を懐古してから、《Je crois en toi ! Je crois en toi ! Divine mère, / Aphrodité marine ! — Oh ! la route est amère / Depuis que l'autre Dieu nous attelle à sa croix ; / Chair, Marbre, Fleur, Vénus, c'est en toi que je crois》：「われ御身を信ず。われ御身を信ず。神なる母、海のアフロディテよ。嗚呼、別の神が吾等をその十字架に繋ぎてより、前途は険し。ヴィーナスよ、御身は肉体なり、大理石なり、花なり。御身こそ、吾は信ず」と、「スピリット」であるキリスト教の「神」を否定して、「肉体」である異教の神に熱狂的な信仰を捧げたのであった。なお、「天体」も《corps》であることを指摘しておく。

従って、後ほど自分自身を「偶像」に仕立てた時も、何よりも、その「肉体」が強調されたのである。例えば、*Les Sœurs de charité*「慈愛の姉妹」では、自画像を描いて、《le beau corps》（美しき体）と表現している。その部分を見てみよう。《Le jeune homme dont l'œil est brillant, la peau brune, / Le beau corps de vingt ans qui devrait aller nu, / Et qu'eût, le front cerclé de cuivre, sous la lune / Adoré, dans la Perse, un Génie inconnu》：「青年の眼は輝き、肌は褐色にて、20歳の美しき体は裸が似合うらむ。彼はペルシャにて、月下に、額に真鍮の輪をつけて、いまだ知られざる守護神を崇拜しけむ」（彼は当時16歳であったが、*Les Illuminations*にも「20歳」という表現がある）。ここは言うまでもなく、「千一夜物語」になぞらえたものであり、「額につけた真鍮の輪」とは王者の印であるが、彼が「夜空」を見た時に、額に受けた月光のことである（*Jeune ménage* 参照）。それから、ここの「裸」の意味であるが、実はこれについては、先の *Soleil et chair* の引用部分にすぐ続けて、こう述べられていたのであった。《— Oui, l'Homme est triste et laid, triste sous le ciel vaste. / Il a des vêtements, parce qu'il n'est plus chaste, / Parce qu'il a sali son fier buste de dieu, / Et qu'il a rabougri, comme une idole au feu, / Son corps Olympien aux servitudes sales》：「然り、人間は哀れなる醜き者。広大なる天空の下で哀れなるぞ。衣服を纏うは、もはや純潔にあらざればなり。神の如く堂々たる半身をば汚したればなり。偶像を火で焼くが如く、オリンポスの神と同じ体を汚らわしき奴隷状態におきて、その発育をば止めた

comme tu veux》であった。ランボオの、このような「悪態」は、ほんの一例にすぎない。全篇が、悪魔主義者ならば随喜の涙を流して喜ぶほどの、強烈な冒瀆的言辭に満ち満ちた作品となっているのである。だが、勘違いをしてはならない。ランボオは、イエスが人類を今すぐ救わぬことを、本気で怒っているのであるから。

かくして、彼は先ほどのような途方もない方法論を、文字通り死に物狂いで実践したのであった。そして、後になって、その意図を具体的に述懐したのが、あの、「吾は新しき花と、新しき星と、新しき肉体と、新しき言語をば作り出さんとせり」なのである。これらの中で、「新しき言語」については、「手紙」の中でもかなり詳しく述べられているが、ここでは「新しき肉体」に焦点を合わせねばならない。何故ならば前回の論で、「彼は *Les Illuminations* の中で、何度も『新しい肉体』に言及して」おり、「そのような、『新しい肉体』の具体的な例を、この *Antique* に見ることができるのである」が、「この点に関しては、次回の『*Being beauteous* 解釈』で、改めて検討することにした」と述べたからである（*L'Interprétation IV*の36頁と37頁）。しかしながら、この *Being beauteous* は、難解な点では恐らく *Les Illuminations* の頂点をなす作品であり、十分な準備なしには取り組みぬことは、火を見るよりも明らかであった。そして、なぜ「新しい」のか、その意味を根本的に知るためには、どうしても「聖書」を避けて通るわけには行かない。そればかりか、ランボオの存在自体も、結局は「聖書」抜きには語れないことが益々はっきりして来たのであった。そこで、全体を捉え直す必要もでてきたために、今回は継続ではなく、別の論となった次第である。

4 「新しき肉体」

そのような訳で、先ず「新しい」という言葉が何を意味するかを追求したが、こちらの方は、以上によって十分に明らかにされたと思う。残るは、「肉体」の方である。ランボオは、実際には《chair》（肉）と《corps》（体）の、二つの言葉を使っているが、一般に《corps》の方が広義に用いられるだけで、人間に用いる時は、共に「肉体」を指す。そして、注目すべきことは、これが《esprit》（そのまま「スピリット」としておく）の反意語である点であろう。ランボオはどうやら、この《esprit》を否定して、《chair》や《corps》を肯定したいのではあるまいか。何故ならば、「スピリット」こそは、「聖書」の

chargé de l'humanité, des *animaux même*》：「彼（詩人）は、人類を背負っているのです。さらに、『動物』までも。」かくて、この狂気は、意志によって実践された。

それにしても、何故、そこまでしなければならなかったのか。いくら「使命」とは言え、まことに理解しにくいことであるが、実は彼自身の中に、根本的な動機があったことを知らねばならない。それは勿論、自分のためなどではなかった。彼は幼い頃より既に、「人類の悲惨」に心を痛めていたのである。例えば、*Les Poètes de sept ans* 「7歳の詩人」などが、それを題名通りに示していると言えよう（「7歳」とは、小学校へ入る前ということであろうが、「聖書」では、「7」は「完成」を表わす）。その他、彼の「初期詩篇」には、他に例を見ないランボオ特有の《*la charité*》（慈愛）が随所に見られて、これが彼の大きな魅力となっている（それは普通の憐みとは異質のもので、これがランボオを解く「鍵」となるであろう）。そのような彼の「慈愛」の対象になったのが、要するに「子供」であり、「女」であり、「労働者」なのであった（いずれも人間社会の「弱者」である）。先の「手紙」で、彼が、「詩人」になることを「労働者」になると言い、そのために休業中であることを「ストライキ中」と呼んだのは、このために外ならない。

一方、キリスト教は、このような「人類の悲惨」を終らせることを約束している。しかし、それが終るところか、ますます増大するのを目の当りにした彼は、キリスト教が積極的行動によって人類を救わぬことを批判して、ついに自分が立ち上がったのであった。そのような、彼の批判が次第に高まって、遂にその怒りを爆発させたのが、あの未完の力作、*L'Homme juste* 「正義の人」である。その時の、「正しい人イエス」に対する悪口雑言は、すさまじい限りであった。例えば、《*Pleureur des Oliviers*》：「オリーブ山の泣き虫よ」と罵っているのは、勿論例の「ゲッセマネの祈り」のことであり、死を目前にしたイエスが、「わが心は深く悲しみ、まことに死なんばかりなり」（マタイ伝、二十六章三十八節）：《*Mon âme s'est profondément attristée, oui, jusqu'à la mort*》と弟子たちに言い、次いで「神」に向かって、「わが父よ、可能なりせば、この杯を吾より遠ざけ給え」（同三十九節）：《*Mon père, si c'est possible, que cette coupe passe loin de moi*》と祈った、あの名高い見せ場を弥次ったのである（「杯」とは、「神」がイエスに命じた「死」のこと）。これに続くイエスのセリフが、あまりにも有名な、「されど、わが望むが如くに非ず、御身が望むが如くに（為し給え）」：《*Cependant, non pas comme je veux, mais*

が、強くあらねばならず、また生まれながらの詩人であらねばなりません。しかも僕は、自分が詩人であることが分ったのです」と、途方もないことを、非常な早口で語っている。勿論、彼は以前から、かなりの詩を書いていた。しかし、それらは自覚のない故に無価値なものと考えて、そのノートを預けた相手に、焼却するよう懇願したのである。もはや明らかのように、彼の「放蕩」とは、普通の放蕩では有り得ない。それはむしろ、逆に「苦行」と呼ぶべきものであろう。以前に解釈した *Parade* の中の、《*Pas de comparaison avec vos Fakirs*》：「あなた方の『行者』とは比較にならぬ」とは、この事を指しているのである（*L'Interprétation III*の105頁）。これを称して「放蕩」と言い、また「ストライキ中」とも言った訳であるが、要するに、これがランボオなのであって、この韜晦が分らないと、この詩人は面白くないのではあるまいか。そこには、たとえ八つ裂きになっても笑うという不敵な精神が潜んでいるのだが、それが彼の殉教者魂に外ならない。

では、その二日後の、もう一つの「手紙」（詩人 Demeny 宛）を見てみよう。そこでは少し落ち着いて、更に詳しく説明しているからである。《*La première étude de l'homme qui veut être poète est sa propre connaissance, entière ; il cherche son âme, il l'inspecte, il la tente, l'apprend*》：「詩人になりたい人間が最初に勉強することは、自分自身を完全に知ることです。自分の魂を探し求めて、その魂をよく調べ、それを試しにかけて教育するのです」とか、《*Le Poète se fait voyant par un long, immense et raisonné dérèglement de tous les sens. Toutes les formes d'amour, de souffrance, de folie ; il cherche lui-même, il épuise en lui tous les poisons, pour n'en garder que les quintessences. Ineffable torture où il a besoin de toute la foi, de toute la force surhumaine, où il devient entre tous le grand malade, le grand criminel, le grand maudit, — et le suprême Savant ! — Car il arrive à l'inconnu !*》：「詩人が『予見者』になるのは、『全感覚』の、長期にわたる、大々的な、計算された『乱脈』によってです。それは、あらゆる様相の愛と苦悩と狂気のことであって、詩人は自分自身を探求し、自分の中のあらゆる毒を味わい尽して、その精髓しか残しません。それは筆舌に尽しがたい責苦であって、それには、あらゆる信念と、あらゆる超人的な力が必要です。そのような責苦の中で、詩人は飛び切りの重病人や重罪人や極悪人となり、遂には至高の賢者となるのです。何故ならば、『未知なるもの』に到達したのですから」など。それは、正気ではとても実行できることではあるまい。だが、《*Il est*

最も大事な仕事を語って、それを「錯乱 その二 言葉の錬金術」と名付けたが、その前に「二人の自分」の方を「錯乱 その一」と呼んだことを、念のために今一度指摘しておく。なお、この《Vierge folle》(狂える処女、愚かなる処女)は、「マタイ伝」二十五章一節から十二節までの「用意のできたる賢き処女と、用意せざる愚かなる処女」を暗示した表現であり、《L'Époux infernal》(地獄の夫、悪魔のごとき夫)もまた、イエスが l'époux des vierges (処女たちの夫)であり le céleste époux (天上の夫)であるのに対抗したものとなっていることは、既に述べた通りである (L'Interprétation IVの38頁)。「定説」よ、この「愚かなる処女」が何故ヴェルレーヌなのか。

すっかり長くなったが、《voyant》には以上のような意味が込められていることを、前以って言っておきたい (さもないと、分りにくいので)。さて、ランボオは当時16歳であったが、この手紙 (担任教師 Izambard 宛) の中で、《Je serai un travailleur : c'est l'idée qui me retient quand les colères folles me poussent vers la bataille de Paris, — où tant de travailleurs meurent pourtant encore tandis que je vous écris ! Travailler maintenant, jamais, jamais ; je suis en grève》:「僕は労働者になるつもりです。そう思えばこそ、気違いじみた怒りでパリの戦いに参加したいのに、自分を抑えているのです。こうして手紙を書いている間も、パリでは今なお大勢の労働者が死んでいるのですが。でも、いま働くのでは決してありません。今は決して。僕は、ストライキ中なのです」(「パリの戦い」とは、「パリ・コンミュンの乱」のこと)と述べているように、普仏戦争後の動乱の中で、彼の心の中でも「大変化」が起きていたのであった。それが、要するに「使命」の目覚めだったのである (この論では触れないが、《mission》という言葉は、幾つかの作品で意味深長に用いられている)。そこで「手紙」は、更に続けて、《Maintenant, je m'en-crapule le plus possible. Pourquoi ? Je veux être poète, et je travaille à me rendre voyant : vous ne comprenez pas du tout, et je ne saurais presque vous expliquer. Il s'agit d'arriver à l'inconnu par le dérèglement de tous les sens. Les souffrances sont énormes, mais il faut être fort, être né poète, et je me suis reconnu poète》:「僕はそこで、目下できる限り放蕩をしています。何故ですって。僕は詩人になりたくて、『予見者』になる努力をしています。先生には何のことかさっぱりお分りにならないでしょうが、僕にも殆ど説明できそうにありません。要は、『全感覚』の乱脈によって、未知なるものに到達すること。それが問題なのです。その苦痛は大変なものです

Israël, voici comment se serait exprimé un homme, quand il partait pour chercher Dieu : “Venez, et allons chez le voyant” ! Car le prophète d’aujourd’hui, on l’appelait autrefois le voyant》。

・それでは、彼は何故、今の prophète「預言者」(神の通訳の意) を用いなかったのか。それは何とも奇妙な発想に見えるかも知れないが、この voyant (e) は、盲人と結婚した「目明き」を指す言葉でもある為だった。ここでも結論から述べたが、要するに、「使命」に目覚めて生まれ変わった彼(男)が、「目明きの夫」になって、それまでの自分(女)である「盲人の妻」の手を引く筈なのである。何故ならば、あの人口に膾炙した、《Je suis un autre》:「われは他人なり」とは、この手紙で言われたことであり、彼は目覚めた結果、自分の中にもう一人の自分を発見して、それをこのように表現したのであった。「手紙」の中では続けて、《Si le cuivre s’éveille clairon, il n’y a rien de sa faute》:「真鍮が目を覚したらラッパであっても、まったく真鍮の責任ではありません」と述べている。そして、「二人で一人」である所から、これを「夫婦」と見なした訳であるが、その後、この「二人」はどうなったであろうか。

その数ヶ月後に、念願のパリに出た彼は、一時浮浪者も同然であったが、それは、「神聖な仕事」に身を捧げている為、絶対に職に就かないと決意していたからである。そこで、見かねたヴェルレーヌたちが、彼を安アパートに住ませたのであった。ところが、職に就かない彼は、食べる物が無いので、そのまま昼間寝て、この状態で「幻」を見たのである。そして、真夜中に起き出して、それから朝まで、その「幻」を詩に定着させる作業に没頭したのであった。この「仕合わせな時期」を歌にしたのが、あの *Jeune ménage*「若夫婦」に外ならない。何しろ、貧乏な「二人」が所帯を持って、「仕事」は順調なのである(これは「後期韻文詩」の一つだが、L’Interprétation IIIで解釈した)。とは言え、そのようなランボオの念頭には、「マタイ伝」十五章十四節の、「もし盲人の手を盲人引かば、二人とも墓穴に落ちん」:《si un aveugle guide un aveugle, tous les deux tomberont dans une fosse》という、イエスの有名な言葉が絶えず去来したに違いない(「目明き」は、ここから着想したものであろう)。やがて、「男」が先に「別世界」へ行ってしまうと、取り残された「女」は、この世で「やもめ暮らし」となったのであった。それを語ったのが、*Une Saison en enfer* の *Délires I Vierge folle L’Époux infernal*「錯乱 その一 愚かなる処女 悪魔のごとき夫」であり、その最後に、《Drôle de ménage》:「おかしき夫婦ぞ」と、自分で笑ったのである。彼は次に自分の

「神」を知るに至るのである。その時、これは天才デカルトも通った万人の道であることに、初めて気づくに違いない。そこで、「神」は完全であるが故に、物についてはすべてが必然である因果関係が成り立って、それぞれが存在理由のある物となるのである。つまり、それはもはや、「無意味」なのではない。従って、ある現象を「偶然」と呼ぶことは、そこに「無意味」という烙印を押し出すことであるから、「根本原因」を知る前は、「分らない」と言うのが本当ではあるまいか。それから、「根本原因」を知るとは、その存在を知ることであって、全てを知ることではないこと。どこまで行っても「神」の領分はあるのであって、「無意味」を知ることは「神」一人が成し得ることを知らなければならない。しかも、無意味な物など一つも存在しないことを知っているのが、この「神」なのである。それ故、何かを「偶然」と呼ぶことは、自らを「全能者」と等しい位置におこうとする、極めて不遜な行為と言わねばならないだろう。人間は、「神に似せて」創られたが故に、他の物とは違って「自由意志」が与えられた。ところが、その用い方を誤ると、自らを「神」にしてしまうのである。しかしながら、イエスの教えるが如く、人は誰しも「放蕩息子」なのであって、全てを失ってから初めて「父」の所へ帰って来るのではあるまいか（「ルカ伝」十五章十一節から三十二節まで。これを小説にしたのが、アンドレ・ジッドの「放蕩息子の帰宅」である）。ところが、ここに、あろうことか、この「放蕩」を「人類救済」の方法論とした人物がいたのであった。外でもない、当のランボオ自身のことである。

3 「放 蕩」

少年時代のアルチュール・ランボオは、地方とは言え、毎年ほとんどの科目で一等賞を独占し、時には学年を飛び越したほどの、神童中の神童であった。その彼が、1871年の五月に書いたのが、かの有名な *Lettre du voyant* 「予見者の手紙」である（実際は二通ある）。

ここで、「手紙」の内容に入る前に、この《*voyant*》について、少しばかり説明しておかねばならない。先ず言葉の意味についてであるが、この「見る人」は、「未来の幻を見る人」のことであって、本来は「聖書」の「預言者」を指す言葉である。「サムエル記第一」九章九節、「かつてイスラエルでは、神を求めて出発する時は、かく言いしものなり。『皆来たれ。予見者の所へ参らむ』と。今日の預言者は、かつて予見者と呼ばれたればなり」：《*Autrefois, en*

質を構成することが分るのであろう。すると、「光」とは、正しく「言葉」と「物質」を繋ぐ中間状態に外ならない。また、肉眼には堅固に見える物質も、その原子レベルの実体は、天体と宇宙空間の如く、その殆どが空間なのである。かくして、「言葉」が万物を創造したであろうことは、容易に想定できるのではあるまいか。「創世記」一章三節、「時に神曰く、『光あれ』と。そして光生じぬ」：《Alors Dieu dit : “Qu’il se fasse de la lumière !” Et il se fit de la lumière》。従って、一見正気の沙汰とも思えぬランボオの試みも、本質的には正しかったと言わねばならないのである。何よりの証拠に、同じ「創世記」一章の二十七節が、「神は人間を自身に似せて創り始めて、神の形に創りぬ」：《Dieu se mit à créer l’homme à son image, à l’image de Dieu il le créa》と言っているではないか（この重複のような特異な表現は、強調と共に、「人間」の創造が他の物とは違って時間がかかったことを示していると思われる）。問題はむしろ、ランボオが「人間」であるにもかかわらず、余りにも性急に、しかもたった「一人」で事を成そうとした点にあるだろう。何しろ、「全能者」でさえ、現在の地球に至るまでには、数十億年をかけているのであるから。しかしながら、それは余の儀にあらず、彼が余りにも「使命感」が強かったためと推測すべきであろう。詩人とは、本来は靈感を受けて「創る人」（poèteの語源）なのである。そこからすれば、古来、「詩人」が人類の先頭に立つと言われて来たのも、むしろ当然と言わねばならない。時代が下るにつれて、その地位も落ちて行ったのである。「言葉」を、人を欺く道具にまで落したのは誰であろうか。また、人を攻撃する武器にしたのは。「黄金時代」は遠くなりにはけり。

一方、「偶然」という観念を用いて「必然」を否定し、それによって「神」をも否定する、例のよく知られた論があって、こちらは時代が下ると共に栄えて来たのであった。勿論、「必然」と「偶然」はギリシャの昔から論議されたことであるが、最後の「鉄と粘土の時代」（ダニエル書）の現代はエピクロス派が圧倒的に多いために、敢えて今一度論じてみよう（要点だけだが）。

先ず、人は如何なる時に「偶然」という考え方をするのか。それを考えてみると、結局、「原因」が分らない時であることが分る。そもそも人間は、その置かれた状況からして、感覚では「根本原因」を知ることが出来ないのである。故に、「すべては偶然に外ならない。」しかし、誰でもいずれは、自分のこのような不完全な状態に気づく時がやって来よう。そして、その「不完全さ」を徹底的に知ることによって、反対の、完全である「根本原因」、つまり

知しているではないか（「聖書」では、「言葉」の確實性を示すために、未来のことをよく過去形で表わすのである）。そこでイエスも、例えば「ルカ伝」十二章四十節で、「汝らも用意しておくべし。人の子は、思いがけぬ時にぞ来ればなり」：《Vous aussi, tenez vous ptêts, car c'est à l'heure que vous ne pensez pas que le Fils de l'homme vient》と教えたのであった。これは勿論、最後の、「イエスの再臨」のことである（彼は「神の子」とも、「人の子」とも言われる）。

再びランボオに戻るが、彼が「新しい」と言う時は、これらのことを踏まえていることを知らねばならない。さもなければ、彼の詩は理解不能となるであろう。とは言え、いかなる天才であれ、「詩」によって「新しい天地」を作ろうとするのは、「気違い沙汰」ではあるまいか。しかしながら、これは、彼が好んで自分に呈した言葉であった。後に述べるように、すべては、最初から承知の上のことなのである。では、何故なのか。

そのような「狂気」の根拠は、やはり「聖書」に求めることができるであろう。「ヨハネ伝」は、次のような、よく知られた言葉で始まる。「初めに言葉あり、言葉は神と共にあり、言葉は神なりき」：《Au commencement était la Parole, et la Parole était avec Dieu, et la Parole était dieu》。今では、最初に「ビッグ・バン」があって、宇宙が誕生したとか。だが、小さな花火でさえ、かなりの科学的知識と、技術と、既に存在する物質が必要なことは言うまでもあるまい。「無」からは、何も生じないのである。また、地球の原水爆を一度に爆発させると、そこに何か「秩序ある世界」が出現するだろうか（コスモスは、「秩序」の意）。勿論、「爆発」が物の「秩序」を破壊することは、子供でも分ることである。従って、根源的な「創造」とは、「神」の創造しようという思念、つまり「言葉」から始まるのは明らかではあるまいか（まだ「神」の存在を認めたくないという向きは、今しばらくお待ち願いたい）。では、その「神」自身はどうかと言えば、それは永遠の存在であることを、例えば「黙示録」一章八節の、「我はアルファ（最初）にしてオメガ（最後）なり。いま有り、かつて有り、これから生ずる者、つまり全能者なり」：《Je suis l'Alpha et l'Oméga, Celui qui est, et qui était, et qui vient, le Tout-Puissant》などが示している。一方、人間の側から、「究極の物質」の探求が蜿々と続けられて来たが、光が「波動」と「粒子」の性質を合わせ持つことは、よく知られていよう。この事実は何を示しているのか。もし「全能者」の側から見るとすれば、「言葉」が波動となり、波動は粒子の形となり、粒子は物

et la folie de Rimbaud 参照)。そこは勿論、現実のアメリカではなく、「レヴィアタン」や「ベヘモト」などの、「旧約」の怪獣も登場するような、驚天動地の「新世界」なのであった（「レヴィアタン」は「イザヤ書」その他にしばしば登場し、「ベヘモト」は「ヨブ記」に出てくる）。それ故、彼言うところの「新しき花」や、「新しき星」や、「新しき肉体」や、「新しき言語」は、そのような、旧来のものとは全く異なった、何か本当に新しい「天地」を目ざしたものだと思わねばならない。

ここで、いよいよ「聖書」の本登場となる訳である。これまでは、そのための布石であったと言えよう。そもそも、この「書物」という得体の知れない書物は、一体何であるのか（「書物」は、言うまでもなく Bible の語源）。これが極めて難解であることは最初に述べたが、それは普通の想像を絶したものである。従って、完全に理解することは、先ず不可能と思われるが、それを承知の上で、敢て一言で説明してみよう（あまり「時間」がない為に）。それは要するに、「神」がこの地球を「新しい地球」に作り変えるので、その「用意」をせよという、「告示」なのである。

すると今度は、そのような「神」とは、一体何者なのかを問題にしなければならない（誰が、どのようにして、その告示を受けたかは、いずれ明らかになるであろう）。何とも大それたことを言う「神」であるが、例えば「イザヤ書」四十五章十八節では、「天（宇宙）の創造者エホバ、彼こそは真の神にて、地球を生みて育てし者。彼こそは地球を堅固に築きし者にて、理由なく創造したるに非ず、人を住ます為に作りたる者なり」：《Jéhovah, le Créateur des cieux, Lui, le vrai Dieu, celui qui a formé la terre et qui l'a faite, Lui, celui qui l'a solidement établie, qui ne l'a pas créée pour rien, qui l'a formée pour être habitée》とされている。先ずは「紹介」である。そして、同じ「イザヤ書」の六十五章十七節で、その「神」曰く、「我いま新しき天と、新しき地を創造せんとす。されば、人は以前の事を思い出すまじ。また思い出して胸を痛むまじ」：《voici que je crée de nouveaux cieux et une nouvelle terre ; et l'on ne se remémorera pas les choses précédentes, et elles ne monteront pas au cœur》と。これが、いわゆる「神の計画」に外ならない。そして更に、「黙示録」二十一章五節になると、「王座に坐せし者曰く、『我いまや、すべての物を新めぬ』と」：《Celui qui était assis sur le trône a dit : “Voici, je fais toutes choses nouvelles”》と語ってから、続く六節で、「これら（神の言葉）は実現したり」：《Elles se sont accomplies》と、何と、もはや完了を告

stice》：「われは正義に刃向いぬ」が、先の *L' Homme juste* の事を指しているのは明らかである（「聖書」の《justice》は、「義」または「公正」と訳される重要な言葉）。また、すぐ続けて、《Je me suis enfui》：「われは逃げたり」と言ったのは、その後で、自分の世界に閉じ籠ったからであった。どちらも、いかにもランボオらしい、彼一流の表現と言えよう。

そのような彼も、子供の時は熱烈なクリスチャンであった。たとえば、意外に聞こえるかも知れないが、これは伝記が伝えていることでもある。従って、彼の作品そのものが、彼が決定的に「聖書」の影響を受けていることを、ネガティブに、はっきりと示しているのも当然であって、改めて驚くには当るまい。「聖書」に最も近いのは、いわゆる「キリスト教徒」ではなくて、案外ランボオかも知れないのである（普通のキリスト教徒は、「聖書」をよく知らない）。実は、ランボオと「聖書」の間には、深く秘められた特別の関係があるのだが、もし可能ならば、必要な時に、少しずつ語ることになるであろうか。

2 「新しき天地」

ランボオの最後の作品が、通説の *Les Illuminations* ではなく、*Une Saison en enfer* であることは、既に以前の論で十分に証明したので、ここではもはや触れないが、この「18年の生涯の決算書」の、さらに最終章である *Adieu* 「さらば」において、いよいよ最後の未練を断ち切るために、《J'ai essayé d'inventer de nouvelles fleurs, de nouveaux astres, de nouvelles chairs, de nouvelles langues》：「吾は新しき花と、新しき星と、新しき肉体と、新しき言語をば作り出さんとせり」と、今一度、自分の命をかけて試みたことを回想したのであった。以前に述べたように、「Saison は、その全体が *Illuminations* の解説である」（*L' Interprétation III* の108頁）。従って、*Derniers Vers* 「後期韻文詩」も含めて、*Les Illuminations* の全体のことを言っているのだが、実際は *Poésies* 「初期詩篇」の *Ce qu'on dit au poète à propos de fleurs* 「われ詩人に花を語る」なども、正しく《de nouvelles fleurs》（新しき花）以外の何物でもない。そのような「花」は、どこにも存在しないのであるから。また、同じ *Poésies* の最後を飾る代表作 *Le Bateau ivre* 「酔える船」（これまで述べたように、この「船」は彼自身を示す）も、実は「旧世界（ヨーロッパ）」（le vieux Monde）を脱出して、「新世界（アメリカ）」（le Nouveau Monde）へ行ったのである（この点については、拙稿 *Le Bateau ivre ou la clairvoyance*

ここまでは、ランボオと「聖書」の共通事項という観点から、それぞれを別箇に見てきた。今度は、この両者の関係に目を移さねばならないが、それは極めて複雑なものであることを、前以ってお断りしておく。と言うのも、ランボオ自身は、その作品を見る限り、常に反キリスト教の姿勢を崩していない。ところが、彼が最もよく読み、最も影響を受けたのが、外ならぬこの「聖書」なのである。本当はこれが真相であって、それ故、この問題の結論になる訳であるが、すでにお気づきのよう、問題が多岐にわたる時は、分りやすいように、最初に到達地点を示すことが多い。

ランボオが、少年時代の母親故に、その強制された「偽善のキリスト教」を極度に嫌うようになったのは確かである。例えば、*Les Poètes de sept ans*「七歳の詩人」で、まっさきに語ったことが、《*Et la Mère, fermant le livre du devoir, / S' en allait satisfaite et très fière, sans voir, / Dans les yeux bleus et sous le front plein d'éminences, / L' âme de son enfant livrée aux répugnances*》：「そして母は、お務めの本を閉じ、げに誇らし気に心満ちて立ち去りしが、子の青き眼と高き額の中に、その嫌悪に満てる心をば見ざりき」なのであった（ここの「お務めの本」とは、毎日読むのが務めの本、つまり「聖書」のこと）。そして、そこから反キリスト教の汎神論者になったのであるが、彼の作品も、ここから始まっている（一般に、詩人は皆、汎神論者であると言う）。更には、*Lettre du voyant*「予見者の手紙」が劇的な形で示している如く、詩人として「人類救済の使命」に目覚めた彼は、「人類を救済しないキリスト教」を一段と激しく批判して、遂には全面对決に至ったのであった。その頂点をなすのが、力作 *L'Homme juste*「正義の人」である（それは「神」から見て「正しい人」であるから、イエスを指す）。その後、自分の中に閉じこもって、蚕が口から糸を出して作ったマユの如く、自分の中から作り出して、外部と遮断した世界。それが、あの *Les Illuminations*（そのまま「イリュミネーション」とする）であった。だが、あに凶らんや、「羽化」せずに死にかけた彼は、発狂寸前のぎりぎりの所で、やっと自分の非（その試みが「不可能」であること）に気づいたのである。これらの経過を語ったのが、「*Les Illuminations* の前に書かれた」と言われる *Une Saison en enfer*「地獄時代」に外ならない（日本では「地獄の季節」と訳されているが、この《*Une Saison*》は「青春時代」のことで、いわゆる「季節」とは違う。従って、正確には「地獄の青春時代」と訳すべきであろう）。その序文で、彼は自分の過去を極めて簡略に要約しているが、その中の、《*Je me suis armé contre la jus-*

le nord sur le lieu vide, / Suspendant la terre sur le néant》。それが結局は何を意味するかが分った時、恐らくは、誰しもが深い沈黙を余儀なくされるのではあるまいか。「聖書」とは、正しく理解するならば、信じがたいまでに、驚異に満ち満ちた書なのである。これは聖職者か否かの問題でもなければ、信者か否かの問題でもあるまい。何しろ、そこに述べられたことは、近代や現代の科学的知識を俟って、ようやく理解が可能になり始めたのであるから。しかも、それだけではなく、文学的に見ても、恐らくは最高の詩であろう。その比喩の見事さは譬えようもなく、これに比肩できるのはランボオぐらいか。

今度は、念のために、そのランボオの「宇宙感覚」を確認しよう。これまた枚挙にいとまがないが、分りやすい例として、彼の最初の作品と言われる *Prologue* を挙げたい（疑問はあるが、一般には9歳の頃に書かれたと推定されている）。以下が、その冒頭部分である。《Le Soleil était encore chaud ; cependant il n'éclairait presque plus la terre ; comme un flambeau placé devant les voûtes gigantesques ne les éclaire plus que par une faible lueur, ainsi le soleil, flambeau terrestre, s'éteignait en laissant échapper de son corps de feu une dernière et faible lueur, laissant encore cependant voir les feuilles vertes des arbres, les petites fleurs qui se flétrissaient, et le sommet gigantesque des pins, des peupliers et des chênes séculaires》：「太陽には、まだ温もりがあった。にもかかわらず、もはや殆ど地上を照らしてはいなかった。巨大な穹窿の下にある松明が、もはや微かな明りでしか天井を照らさぬように、地球の松明である太陽は、その火の体から最後の微かな明りを洩らしながら消えかけていたが、それでもまだ、木々の緑の葉や、生気をなくした小さな草花や、松やポプラや柏の大木の巨大な梢が見えていた。」この箇所は色々な意味で重要な為、これまで何度か引用したが、そこに見られる宇宙的視野は、何の説明も要さぬであろう。しかし、代表作の一つである *Voyelles* 「母音」の中の、《Silences traversés des Mondes et des Anges》：《天体と天使のよぎりし沈黙の世界》は、かなり難しいに違いない。詳しい説明は省くが、これは無限の宇宙空間と永遠の時の流れの中で起きた「大宇宙の荘厳な神秘劇」であって、そこに様々な天体が現われては消えて行ったこと、またその天体の生命を救う使命を帯びた者たちがいて、やはり現われては消えて行ったことを、わずか一行（十二音綴）で表現したものなのである。前回に取り上げて解釈した四行詩、L'Étoile a pleuré rose au cœur de tes oreilles は、彼の、このような「宇宙感覚」から生まれたものであった。

そこには何か重要な、共通事項が隠されているのではないか。

結論から先に述べよう。ランボオの第一の特徴は、私見によれば、その比類のない「宇宙感覚」にあると言ってよい。これは前回に論じた *L'Étoile a pleuré rose* 「星がバラ色に涙して」などが、その良い例になるであろう (*L'Interprétation des Illuminations* IV)。そして、「聖書」こそは、その人間とも思えぬ「宇宙感覚」が特徴なのではあるまいか。それが何を意味するかは、以下の具体例によって、次第に判明する筈である。

先ず、よく知られた、「創世記」の冒頭の「天地創造」であるが、これが宇宙的空間を語ったものであることは、改めて言うまでもあるまい。また、「神」は六日で創造を完了して、七日目は休んだとあるが、ヘブライ語の「日」(ヨーム)は、必ずしも24時間とは限らず、様々な期間や時期を示すためにも用いられる(フランス語の *les beaux jours* も、「気候のよい季節」や「青春時代」を指す)。それどころか、「聖書」の一日は、場合によっては千年を指すことさえあるのである。例えば、「詩篇」九十章四節の、「御眼には、千年も、過ぐれば昨日か、不寝番の如し」:《*mille ans sont à tes yeux comme le jour d'hier, quand il est passé, / Et comme une veille durant la nuit*》(*Traduction du monde nouveau*) や、「ペテロ第二の手紙」三章八節の、「エホバには、一日は千年の如くして、千年は一日の如し」:《*pour Jéhovah un jour est comme mille ans et mille ans comme un jour*》など。「創造の一日」は、勿論「人間の一日」ではなく、「神の一日」である。それを「千年」と呼ぼうと、「一億年」と呼ぼうと、同じであることを知らねばならない。

以上のように、「天地創造」は「聖書」の宇宙的時間感覚を示す例でもあるが、もう一つ、宇宙的場所感覚を示すものとして、「イザヤ書」四十章二十二節を挙げよう。「円い地球より高い所に住む方ありて、地の住民は蟻の如し」:《*Il y a Quelqu'un qui habite au dessus du cercle de la terre, dont les habitants sont comme des sauterelles*》(ここの《*sauterelles*》は、日本語の表現として「蟻」に変えたが、「イナゴ」や「バッタ」のことである。人間が小さいだけでなく、「バッタ」のように大挙して侵入し、地を荒廃させることを暗示している。人間が武具をつけた様を想像されよ)。この「イザヤ書」は、紀元前(732年)のもので、現代の宇宙飛行士はもとより、十六世紀のコペルニクスよりも前であることは、勿論言うまでもない。更に、紀元前1473年の「ヨブ記」二十六章七節を見るならば、もはや疑問の余地はないであろう。「彼(神)は地球を虚無の上に吊りて、北をば何もなき所へ向けり」:《*Il étend*

ランボオと聖書

中 村 弘

序

1873年、18歳で「詩人」を廃業したランボオは、その後波瀾に富んだ余生を送ったが、今からちょうど百年前の、1891年に世を去った。享年37歳。やがて、数知れぬ解釈陣に包囲された彼は、驚くべき誤解と偏見に晒されて来た。その余りの異様さに、何度か世人の理解を求めたが、己の無力を知るのみ。そこで今回は、更に一步を進めて、その原因の究明を試みた所、単に周囲に問題があるだけでなく、彼自身もまた、人の理解を拒否していることが判明したのである。それは勿論、本人の意志とは係わりのない事だが、例えば、ランボオ独自の「両性具有観」などは、世間の常識が受けつけぬ所であろう。だが、最大の問題点は、これまで一世紀以上にわたって、この詩人の本来の姿が極度に歪曲されて来たことにあるのは、疑問の余地がないと思われる。

しかしながら、今や全ての人が、「ランボオとは如何なる現象か」を知るべき時が来たのではあるまいか。その理由は前回にも述べたが、要するに、目下の最も切羽つまった問題に直接かかわるからである。それ故、調子が少し高い所は、お許し願いたい。

1 宇宙感覚

ここにもう一つ、数十億冊と言われる世界一の超ベスト・セラーでありながら、殆ど読まれず、また正しく理解されてもいない、世にも不思議な書物がある。言わずと知れた、例の「聖書」であるが、この「ランボオと聖書」が共に体よく敬遠されて来たということは、考えてみれば、まことに奇妙なことと言わねばならない。ランボオもまた、皮肉なことに名前だけが有名で、実際に読む人は極めて少ないのである。もしかすると、それは「偶然」などではなく、